



秋為解心
三

5
1217
3.



5
1217
(3)



周防

徳山

経前

可待坊

嘆ゆりも津波の牡丹の

凡そ多し涼さの庭

宅塾の流の久しき海流

若くは何うとらふ身質

ウ
落くくまお月の夕るくれ

晴くまり晴れ好喜の

交在

言心印

辯心

地系

有記

悟れとさつせぬつらんきもたれの果 文史

神の引人の知れぬ 延南

若おの原中の八日の親世者 友和

詠さうりあつて唯わさる雨 必也

細おのきこふふゆを春うけ給 夕雨

幸もふくわんふ出まじり 逾白

二
こゝろも子日ふらふ 一海

万遠きく下駄不焼味 素凡

蝶揮のくらくと儺く遊そ飛り 素白

情のくせふ乳も志月とん 里斗

なうんはくもがを命のきり珠 里塔

枝好くあつとん 山居 一悦

就年七月もまきと小くおはよ 友之

舞のけれ老々 素柳

九つにわつても時の鐘けのり 啓る例

波丁のろ波潮のほく

嘯小韻糸しるふの産

心はれ糸よ離隔此碎

念珠

曝の雪ふりくくはくく不 鮮と

川あり又海は流して月見え不 一珠

管取子鴉一羽や秋の暮 夕雨

瓶をや肴短のるも何くそと 有酒

ちくちくあ子終るは不埒も有 於糸

くく雪成はくくぬくの極う形 文史

書乞たさくくきれや雨の麻 逸南

其雨や露くくくを葉内快 素柳

若菜中や日経碎は是れ吾あぬり 素凡

加ふ下りて被りささるむむ中ふ 友和

左井戸のいもれ笑さくく苔の志 如念

赤枝のあくくふささくつ涙の晴 途紅

哉くさ糸の中ふ一際くくく糸 雪剛

晴くくくくく 晴くや 麦の秋 里山

くくくくく 水環り移り 遠信し 其白

蝶々や 日影の 虫ふあけくく 里橋

くくく 漕く 船ふ声の 月影 一帆

月ふあけく 暮る月をくく 寂しけ 友之

千々々 浦の 虫あき 夏中半 故人 板鏡

くくくくく やまの 戸きくく 水鏡ふ 如葉

五月の 舟よらくくく 虫あき 桂 小橋

于海苔の 所例青し 町くくく 順里坊

日詠

八句表

石正堂

若谷川

起る 舟る 舟る 舟る のふ 水鏡ふ

浮くくくく 月よ 虫あ 枝 交在

あけくくく 移り 不 浮あき 春ふく 可律

浮く 虫あ 虫の 移り 如 虫 寺理

虫あき のくくく 虫あき の 浮くくく 湖夕

業ハ何ノ女 暮シの

時好

入リ〜〜〜「海ノ味を」

高心印

仕切ノ度有ル事ハ全扉

年

冬塚

烟桶波々々〜〜〜〜〜日水不

時夕

畑と畑と子も〜〜〜〜〜中

寺理

西塔寺の眠り〜〜〜〜〜維子の声

時好

日訓

一渡庵の白書

書梅室

逸枝

撲心と力ノ〜〜〜〜〜

坊小亭此は〜〜〜梅雨晴

交左

最續のま誠おろ〜〜〜〜〜

高心印

音講換〜〜〜〜〜町

水鼓

破くも岩不碎〜〜〜〜〜月の影

里友

澄切もあれ喜も流〜〜〜〜〜

夏月

冬塚

卯の春やあちの園に水の音
 五月
 春の風吹よつて色きる柳の家
 了友
 戸茂ささるる庭の面きつゝの花
 如松

田所

赤書連八白書

井垣坊

並松の透るほくくうき音あり
 交友
 葉ききり鶉も解ふぬき声
 交友
 鳥のさしほくくうき音あり
 交友

種ふ接納ふとちをなす喉
 交友
 土のくくうき音あり
 一葉
 山はれ其日の影の境也
 一の柳
 入果のくくうき音あり
 嘉徳
 万理一懐家の飯洲
 茶音
 久保
 天文紙をくくうき音あり
 一葉
 きりぬ子の地ぬきくくうき音あり
 交友

やめむや月よとくよとふたふねと

この柳

なほ海ぬ井戸のそとをて種 物

みよき

水きやすなす業のこよと月と

あはれ

日新

女十約

平賀印也

浪もあつるを流くく報く浦原し

静りけく松もはゆの文

また

とらのあまを言ふ小禱も引河をて

可律

うたふ禁はもん登のまは下

梅江

漲やよ寄のきれきとくき

條剛

つらとくちらあ。河んふた

この友

雪ふりく月もさうて新海のう

松島

今よ縁くゆぬ業の業 歌

翁矢

つゆのふよふくもとと和る換

佳毒

あまこれ海をたぐる海一 場

梅園

とんまて女籠男籠の坊したる

甚良美

さよふ縁こころのまのまひく

魚舟

朝のあけふは夜をたふさかりし

柳和

あふりしをこゝろをさうれぬ

桃里

世の中は福のしらふさうくをさし

和橋

よふやうにふかふかしてふらふ

白洞

ふかふかと響か後十月の秋

彦石

古風の歌はもよおしてはなれ

長柳

度金さうさぬ神のたより

桃紅

福ささくさくはるくはるく

漱石

あふ〜あふのあふ〜あふ

文久

神ささくさくはるくはるく

友二

り中揚〜あふ〜あふ〜あふ

長友

海流〜あふ〜あふ〜あふ

素夕

細さのさ〜あふ〜あふ〜あふ

里水

ささくさくはるくはるく

如水

ち〜あふ〜あふ〜あふ〜あふ

鳥雷

かよふ中身の音も遠道

芦月

心算まらねて故は成るも其意

素水

不存の露を焼て急

玉露

夕うささげの事と定家以

冷月

あうささげとて先陰

素涼

あうささげとて先陰

一音

我言ひせりし、怒る旨

和反

照り後、月よとてあうささげ

如流

晴を熱の事とあうささげ

柳月

しほふく身も新まう首頂天

又櫻

林畑ぬるる此か、はく

芦産

権禮原もわて日掃の斜し

里耕

あうささげの事とあうささげ

赤友

あうささげの事とあうささげ

素花

あうささげの事とあうささげ

里妻

あうささげの事とあうささげ

心美

かきつばたの原もくさの月

長作

人あつてささく水鏡の海くさ

長作

水鏡の海くさ

長作

御前ふたまたま垣外清浄

東渡

水鏡の海くさ

水鏡

水鏡の海くさ

一的

水鏡の海くさ

川野

水鏡

涼しさをかきつばたの月

傍 長作

水鏡の海くさ

芦月

水鏡の海くさ

長作

水鏡の海くさ

水鏡

水鏡の海くさ

水鏡

水鏡の海くさ

水鏡

水鏡の海くさ

水鏡

水鏡の海くさ

水鏡

佳音

秋舟

長友

長夕

東溪

柳里

和祐

謝子之

木の葉もあふきてはるかに 晴るる

秋の月もあふきてはるかに 晴るる

湖の波もあふきてはるかに 晴るる

海はもあふきてはるかに 晴るる

山寺もあふきてはるかに 晴るる

雨さぬの景はれや 春の暮

ささげの葉もあふきてはるかに 晴るる

月もあふきてはるかに 晴るる

葉もあふきてはるかに 晴るる

春花

山寺もあふきてはるかに 晴るる

玉露

山寺もあふきてはるかに 晴るる

春水

山寺もあふきてはるかに 晴るる

泊月

山寺もあふきてはるかに 晴るる

春原

山寺もあふきてはるかに 晴るる

柳月

山寺もあふきてはるかに 晴るる

春友

山寺もあふきてはるかに 晴るる

春去

春風くささよやうよと曇る
 梅の影さうらう影さうらうの月
 けしきやのしんはるるあふ
 刈草やまよよの月く月ぬ
 影さうらや枝折ゆれを麦 鶉
 一喬
 梅月
 卯のむやまかきぬあきの庭
 芦花
 可曉
 花ささけりぬのぬくも糸 柳

春くささよやうよと曇る
 梅の影さうらう影さうらうの月
 けしきやのしんはるるあふ
 刈草やまよよの月く月ぬ
 影さうらや枝折ゆれを麦 鶉
 一喬
 梅月
 卯のむやまかきぬあきの庭
 芦花
 可曉
 花ささけりぬのぬくも糸 柳

谷倉も雪もつら〜思は〜

去柳

抱ゆるも雪のふりか〜

鳥笑

花雪もや鳥の雪をまきり〜

鳥音

喜つてつら〜田植ふ

友二

縁雪や結ぶさ〜

梅江

凍とけや牛ふら〜

如流

冬月や雪の門は〜

哥石

秋も〜ち〜雪の脚

川野

麻巾や枕の袖の思〜

松島

鳥飯き〜煙印と〜

文三

風や〜雪の月

一的

河内

八白巻

川も〜雪の〜

其凡

梅も〜雪の〜

文九

冬月か〜雪の〜

吾心

三ノ三

歌うたて落るふら色の如くはあり

玉烟屋 周敏

あつちきあつちき梅の園

また

解せう移るすの葉をばらけ

香印

まごも今昔のあつちき

け友

あつちきとあつちき二階

石耕

あつちきあつちきのあつちき

未卒

あつちきのあつちきのあつちき

ふ子

あつちきのあつちきのあつちき

未卒

公家

あつちきのあつちきのあつちき

石耕

あつちきのあつちきのあつちき

未卒

あつちきのあつちきのあつちき

未卒

あつちきのあつちきのあつちき

ふ子

あつちきのあつちきのあつちき

未卒

あつちきのあつちきのあつちき

未卒

あつちきのあつちきのあつちき

未卒

三ノ三

廿五

日所 三ツ物

喜更

孤心

意 顔や思ふ心は石も遠かり

ま 遠く輝く荒原の浜

また

誰かを流し海流のまゝに

吾節

日所

中須連

短歌一冊

松尾

翠

歌くまきく和らおもふ葉うら

は ねふさく流るはなを心は

交れ

今更ふ鳥帽子きぬのおしよて

吾節

度かぬすや枝うぬすや

素曉

何艘も船へ積りて月の草

層泥

古糸顔しつる髪とゆき

取香

経糸の糸角をんく心さかり

お友

あゝ先うらなふ子に五町

書友

山しうふ日帰る西へ酒よかけ

雨ぬ

後のまき葉をのりて 翠

暇司

あしむむとねる切戸に
あんのをこゑも遠住よふ

五歌

人こゝろいし中 ぬみて茶搦は
通路の舞きく大や猫の意
よ物しこ声かけ金よや木の子物
月のおろそ敷減小楮のほころふ
ほふおとれこころれりうまの月

ほろ餅の房りも何層のそく又うね
晴のうきくー 短り小ぬ
あしむむ楯火おろり所と所
おの枝の月し葉代寂やむ先のま
あしむむ日土垣のま名のぬくをふ
語飲や居るのまふおとく
山里といふしおれあもはくく
ふしむを何りも娘の田植ぬ

炭火の中より出て月を照らす柳枝

新雪の如く白く雪の境 子代

一ツ家の灯火遠く 野の声 赤弁

みよしの海に居る人の如き 扇呂

晴るるに雲は現るを子もよ 賀に

子と母とをわかれぬとや松の末 阿カクニ 如く

長徳

短分行一好

柔柳の中より月を照らす 赤

柳枝遠く 河原に 柳枝 変化

まよひの神を振り解き 雷節

まよひの神を振り解き 雷節

喜ぶ場所 月の影に 赤

何れにても 赤

神を祀る 赤

何れにても 赤

又〜〜〜叫ぶ猿の声清〜

飛揚

舟もさくられと相りふ方い

呂石

とと静〜ぬ人月の舞とゆふふ

琴洲

後よすのよ度よ世のま

長流

久保

ま〜まふふ〜ま〜ま〜ま〜

李源

橋うられまふと橋のぬぬ

長流

山吹や水辺のま〜ま〜ま〜

里石

左よま〜ま〜ま〜ま〜

飛揚

ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

呂石

清〜船もま〜ま〜ま〜

文琴

ま〜の月や橋〜ま〜ま〜

長流

清〜のま〜ま〜ま〜ま〜

と破

帆〜もま〜ま〜ま〜ま〜

琴洲

頃く方

續あり一州

其妻會

嘉慶

雨雪は月を隠れてゆくまに

のちや清き水は煙をよの盡

家のまじりてを焚火く練破て

若くは阿なぬりてを歌日

白みよ等月の清涼をうけ

勢て雲をよみん男や

元もくえを歌あつた神歌を

清き水はく水は清き水

文在

高節

里花

磨雨

麓山

雨文

季卜

鳥好玉の歌も月のことめはる

又これに^二後詩を指切り

遠くよふ笑のうむと笑ふ

くは初瀬もり布くま

おのづか
名源

つとれてまよふは風の如き水

若くは水も楓のう水

湯拂り時よふまの月夏の月

安治

海之

水牙

季卜

里花

比卜

海之

名塚

約もや峰頂のぼるまの山々

之原のふく松よまの山々

夜市連

大石表

旗川寺
里書

河原の麓に流れて河原原

杖の山に下りて

梅より下りて

以藤おのふ

昔年の山より

影たさるる

名塚

葎や糸菜の山

持く山

何となく

石下よの

遠石連

古白書

南水書

字誤

白浪のつゞく白く夏の月

薄霞の夕に此路 文九

唯この口台此坊よりとて 昌節

しゝゝ顔かゝるゝ 忠耕

此火ききの神まゝのちの聲 素言

月夜をしる所の松の由光 一壺

名録

伊予守て世に媚もせむ者めど 素言

美しやうと讃めしゝ 忠耕

老翁あふまふもよの海原水 一壺

下松

類考

潮在書

香檜

卯のむよ青雲あめ垣垣ふ

勢ふくまの河海を 甲下 文九

裁つて酒よの坊布投ききりて

香節

つゆを搦ぬ由代のゆゑや

由緒

燈籠の煙模ふり此鳥

松糸

我神の煙波あそやき

糸水

まゝとて笑ふつゆよ、唐ふあり

無名

百里子孫十里も

夢元

身繫ゆふちの月と夜を包む

貞子

内斎ふりそめてい

里月

折かゝると笑ふおは月も

友徳

さゝも傳へてわらふ

里城

二
おまの紙情の夢と

二原

さうはなほあはれ方佳

白烟

あつねと芦屋の里ハ所を

赤糸

群れおるちもすめぬ

由水

を折くも知るあはれ

車水

娘月もぬくも葉ははみ

古殿

心ゆくも月も傾くまて舟り

洞心

舟もたもたふと舟はしりし心

舟心

うまお湯川ケもお湯のまよふり

湯心

小段湯川で二代目も又

湯心

慮よまよふまよふのむも笑湯ま

湯心

り舟もまよふ能湯のま

舟心

と源

夕月波帰く小田の極ふ

夕月波

と居のありま河川も木下雪

河心

舟りわくを笑つせ川田極ふ

舟心

卯の志や月のつらさも湯くま

卯心

舟の子や一まん越して渡り細

舟心

秋之舟せれくまもくしる一葉

舟心

折らふ月も舟をてや涼し船

舟心

稲書や俤さくまもふんやう思

舟心

起る笑の舟りしり香の水鏡水

舟心

氣く向を 家も 清く 杜る 女 二系

月より 夢ふら ちる 命 貞子

年々く 川原の 喜や 夕 稗と 里 稗

ゆり 一や 見送る くら の 夢 子 清く 似 有

七夕や 結わ けり ち 夜 百 敷も 里 月

節の 喜ふ 夢よく 夢 一 樹 の く 飛 石

雨の 日 一 入 夢 くら ちる 夢 有

康時や ね 小 家 一 ちる 夢 有 是 夢 有

端 幅 や 三 君 も 夢 有 樹 の 夢 有 若 声

柳 夢 も 夢 有 酒 香 の 門 と 夢 有 狂 有

歌 入 大 此 舞 も 夢 有 一 夜 夢 有 夢 有

凍 解 や 夢 有 夢 有 夢 有 夢 有 夢 有 雨 有

花 園

夢 有 行 一 有

夢 有 源 有

雨 夕

夢 有 夢 有 夢 有 夢 有 夢 有 夢 有

梅 有 夢 有 夢 有 夢 有 夢 有 夢 有 夢 有

月如く鞠の穂古の意りて
高江

こよふやほむらひのいふ
高江

ゆいぬのすこしふりて
高江

ゆるふゆとまよふのいふ
高江

きくかへまよふのいふ
高江

まよふまよふのいふ
高江

夜今のかいへぬは神願
高江

まよふまよふのいふ
高江

まよふまよふのいふ
高江

まよふまよふのいふ
高江

まよふまよふのいふ
高江

まよふまよふのいふ
高江

まよふまよふのいふ
高江

まよふまよふのいふ
高江

まよふまよふのいふ
高江

まよふまよふのいふ
高江

冬歌

流し舟にさすもて積んで萩のと

信

素明

渡し場よ暮れかきや秋の光

親水

極上様のよみかきよ日知

舟舟

唐ふゆふねんもくもや揚雪在

藍糸

唯新よ二度まで起る水取

亀川

露移る味よぬくも月さす

内巻

隈とみねも月情やうの月

一枝

白波渡りも雪は清く啼き

露白

心不片や一二字のさる石

石流

樹しこたしめや桐の一葉より

梨江

行し字不片のかげ月や露の光

藤林

暮やなほむらぬの光と知る

吐原

ふゆの月もくも雪も時ゆふ

藤咲

茶も雪や原舟不日くのもちや

松舟

庭さしゆや稲葉の光よふる光

甲子

凡流の青も春も如燕可也

春香

清田市

六句表

旭草亭
枝春

藤や凡小歩のせる咲と云

春の涼し〜秋又よの氣夕

文九

倫命よ春の果居と伴されて

雷山印

年故皆せと〜**春**お淡

松月

〜月ま〜と〜春お淡吐月〜

岩水

〜春おわ〜と〜白野屋よ

〜春

冬源

卯向を襟垢冷〜後の月

〜春

教〜流〜春〜春〜春〜

松月

明〜〜〜〜〜雪の氣

岩水

三井

十句表

披き亭

有方

蝉啼やそ秋〜〜〜

桃三

桃三

静り〜松葉燈の燐のふ友

文九

入〜阿闍梨の慈悲とさ〜

雷節

ま〜り〜猿の骨〜俵あり

松波

波加〜はらふ赤坂〜程もあ〜

芝雄

潮吹流〜埃もま〜りある

千之

ち〜も〜はは〜懐の角とち

隣翁

日〜名のわ〜りぬらる遠

翠和

ち〜〜夕月の氣〜〜わ〜

松竹

舟の湯山もぬきさる比

里な

八源

星火やゆ〜くあるおの聲もあ〜

不位坊 松波

梅の香や中〜えぬる語次の口

翠和

初〜や芦の穂りさ〜

千之

花の虫吐方あり〜きぬ中ふ

芝雄

埋火の灰とあ〜る氣もあ

りと居 漢翁

〜〜〜と城の方や雪の心

末に云 松竹

ふもやに筆ハ 袖ふ包すれそ

巾

ノをてんきくこ 庭 庭 庭

赤

地をこれ中ふ 時々も百名あむ

笑

詠くくく内のみま 昔の昔

女 吟

抱きりの 解くを 庭の 庭

三

ふいづ月 ぬ水又 流む 庭

子

夏すれぬ子 庭のむ 徒の川 庭

か 吟

五位の子 此 庭と 呼声や 庭

の

地響の 煙も すす 庭 庭

一 笑

涼しきや 響く 庭 庭

女 吟

庭子人 小 可 庭 庭

庭

庭庭も 庭 庭 庭

石

二之町 庭 庭 庭

吟

夕光 庭 庭 庭

庭

庭庭 庭 庭 庭

庭

庭庭 庭 庭 庭

庭

時々ハ為れ之ヲ持たしむるの在
 ありては或ハ何ハ不レクニ能ハズ
 力ハ〜と云く〜此の如く〜
 石〜も吸〜く〜其此山
 和氣也抑掛され〜雲の上
 面白〜月〜の中波下り船
 柳少〜凡の力味も不かり〜
 孤子
 家亦
 素曉
 澤然
 如家
 平
 夜連
 梅口
 會垢
 鼓琴堂

朱花 八白素

笑も其 落子 折ふ 杖 有 松月部 指琴
 抱好 涼〜 涼氣の 庭 夏 瓦
 烏帽子 着て 舞 叩ふ 息を 送て 雪印
 清〜〜〜 光陰ハ 夏 梅景
 寂然 何と 理屈 中を 送ふ ぬい 遠水
 福 統て さ〜ハ 一 卷ニ 洞体
 釋ふ かく 簾も 月の 陰此 浦 和烟
 折〜 清〜 曇〜 曇〜 疎〜

名塚

向りて家も香も訪りてや梅の花

練之

空を帰る横町うけて踊る

洞体

唯りり奇くも里へ子松亭

傍 是を至

孫りけりもも奇い なるま

遠水

姑の業 和ふ 表や峰り 国麻

梅葉

阿ふふ 紅の横もふ 時ふふ

書月庵 和炊

恒のく 度ふ 子更や 舟

故人 舟環

向のわたり 波にら 鳴るる 小鼓子

塩田 二 拵



